タイトルの「岁月缱绻　葳蕤生香」は「素晴らしい思い出はいつまでも忘れずに、未来は常に花が咲き誇り、春のように明るく希望に満ちていることを願う」という意味です。

第８回

岁月缱绻　葳蕤生香

スイ ユエ チエンチュエン　ウェイ ルイ ションシアン

王　克麗（ワン・ケリ）
1992年、中国の河南省生まれ。
日本の音楽や映画、ドラマを通して日本に興味を持ち、天津職業技術師範大学で日本語を学ぶ。2023年4月10日、中国語のALTとして白糠に着任。

今月のコラムは、白糠学園に勤務するマリ先生に執筆していただきました。

白糠の避難訓練に学ぶ

白糠学園に来て最初の一週間で、日本の避難訓練を初めて経験しました。訓練が始まる前、先生たちはジャケットを着用し、各階に分かれて厳密に手順に従って行動していました。一方、私に与えられた指示はただ一つ、「生徒について行くこと」でした。先生がマイクの前に立ち、訓練の開始を告げると、生徒たちは教室から一斉に飛び出し、全員走り出しました。

私は走るのが苦手なので、すぐに疲れてしまいました。私が奮闘している間、こども園の先生たちが子どもをカートに乗せたり、背中に乗せたりと、一所懸命に避難している姿を見ました。避難所に全員集まった後、校長先生が「10分です。次はもっと早くできるようにしましょう」と話しました。

アメリカでの高校時代は、歩いて避難所へ行くことが決まっていました。それには15分以上かかります。日本では、緊急事態を想定した訓練が真剣に行われ、緊迫感があります。この違いは非常に印象的でした。アメリカでは、緊急事態はどこか遠い出来事のようで、自分たちには関係ないことのように思われています。少なくともロサンゼルスではそう感じていました――最近までは。

ロサンゼルスのパシフィック・パリセーズ地区にある私の高校は、先日の山火事では焼け残りましたが、その周辺はすべて焼けてしまいました。知っていた町はもうありません。友人や家族はほとんど何もできませんでした。火事が起きたとき、誰もがどうしたらいいのか分からなかったのです。

地元での避難訓練は冷静さと秩序を保つことが重要で、一番大切なルールは落ち着いて歩くことです。ロサンゼルスは海に近いのですが津波の避難訓練は行いません。ですが地震には対策があり「ドロップ（まず低く）、カバー（頭を守り）、ホールドオン（動かない）」といった訓練をします。しかし、白糠では、地震が起きると即座に動きます。教師たちは津波警報のニュースをチェックし、窓やドアを開け、生徒たちの教室に駆けつけます。すべてが迅速に行われ、誰もが何をすべきかを知っています。とても関心しました。

白糠ではよくサイレンが鳴っています。アメリカにはサイレンがなく、緊急電話の警報に頼っています。サイレンが鳴るのは大きな災害の時だけです。なので白糠で初めてサイレンを聞いたとき、直感的に「Oh My God!　大変だ、逃げよう」と思いました。

アメリカと日本との違いは考え方の違いにあると思います。アメリカでは、大きな緊急事態が自分たちに起こるとは思っていないので、真剣に準備をしません。でも、今回の山火事で、私たちは備えについて考え直しました。逃げなければならないときは迅速に行動し、自分や他の人を守ることが必要です。白糠での避難訓練を見て、そのことが良く分かりました。不測の緊急事態はどこで起こるかわかりませんが、しっかりと備えていれば自分の命や財産を守ることができるのです。

中央にあるのが高校時代に通っていた学校です。今年1月の山火事で大部分が焼失し、壊滅的な被害を受け、美しい街並みが姿を消しました。